

# 第 1 章

## 古代ギリシアにおける若者教育とスポーツ－実態とその神話化 Youth Education and Sports in Ancient Greece-Myth and Reality

師尾 晶子

### 目 次

はじめに 「健全な肉体に健全な精神が宿る」 (*Mens sana in corpore sano*)

#### 1. 古代ギリシアにおけるオリンピックの位置

##### 1.1 オリンピックの位置

##### 1.2 オリンピック勝者の位置

#### 2. ギュムナシオンという場

#### 3. 若者教育とスポーツ

##### 3.1 アテナイにおける若者教育の制度エフェベΙΑ *ephebeia* の成立

##### 3.2 エフェボイの競技祭参加

##### 3.3 ヘレニズム時代以降のアテナイのエフェベΙΑ制度とギリシア世界への拡散と普及

#### 4. 西欧における古代ギリシアの教育論の受容とスポーツ教育のモットーとしての「健全な肉体に健全な精神が宿る」の普及

おわりに

## はじめに 「健全な肉体に健全な精神が宿る」 (*Mens sana in corpore sano*)

2020年7月17日発効の国際オリンピック委員会 (IOC) のオリンピック憲章に示されたオリンピズムの根本原則の第一項には次のように記されている<sup>1</sup>。

Olympism is a philosophy of life, exalting and combining in a balanced whole the qualities of body, will and mind. Blending sport with culture and education, Olympism seeks to create a way of life based on the joy of effort, the educational value of good example, social responsibility and respect for universal fundamental ethical principles.

オリンピズムは肉体と意志と精神のすべての資質を高め、バランスよく結合させる生き方の哲学である。オリンピズムはスポーツを文化、教育と融合させ、生き方の創造を探究するものである。その生き方は努力する喜び、良い模範であることの教育的価値、社会的な責任、さらに普遍的で根本的な倫理規範の尊重を基盤とする。

根本原則にこの文章が採用されたのは1990年12月に出された1991年のオリンピック憲章からで、古いものではない<sup>2</sup>。しかしながら、この表現は近代オリンピズムの生みの親とされるピエール・ド・クーベルタンの思想にのっとったもの

---

1 オリンピック憲章：<https://www.joc.or.jp/olympism/chapter/pdf/olympiccharter2020.pdf> (2021年2月8日最終閲覧)。日本語もここに記されたものである。アンダーラインは筆者による。オリンピック憲章に根本原則 (fundamental principles) が加えられるようになったのは1955年からで、現在のオリンピズムの定義に近いものがそこに記載されるようになったのは1962年からである。1962年の憲章における根本原理第3項には「オリンピック運動の目的は、すぐれた肉体及びモラルの質の発展を促進することにある」とある。この時のIOC会長は、第5代エイヴリ・ブランディジ (Avery Brundage, 任期1952-1972年) であった。

なお、オリンピック憲章の「生き方の哲学」を古代ギリシアにおける哲学の営みとの関連から探ったものとして納富 (2016) を参照。

2 <https://www.olympic.org/olympic-studies-centre/collections/official-publications/olympic-charters> (2021年2月8日最終閲覧)。

であった。クーベルタンは、1887 年、イギリスの教育、とくにパブリック・スクールの教育について語った講演において、「スポーツとは動作である。…強靱さと技巧は、未開人文明人を問わず、つねに価値を認められてきた。いずれも訓練と鍛錬によって獲得されるものである。身体の資質の喜ばしい成長は倫理の領域においても喜ばしい均衡を生み出す。古代人が *mens sana in corpore sano* と言っているとおりにある」と語っている<sup>3</sup>。

一方、1946 年 7 月に作成され、1948 年 4 月 7 日に発効した世界保健機構 (WHO) の憲章においては、健康は以下のように定義されている<sup>4</sup>。

Health is a state of complete physical, mental and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.

健康とは、肉体的、精神的及び社会的に完全に良好な状態であり、単に疾病または病弱の存在しないことではない（厚生労働省訳）。

健康とは、病気でないとか、弱っていないと言うことではなく、肉体的にも、精神的にもそして社会的にも、すべてが満たされた状態にあることをいいます（日本 WHO 協会訳）。

---

3 Coubertin (1887) 642: Le sport, c'est le mouvement... toujours la force et l'adresse ont été appréciées chez les peuples sauvages comme chez les civilisés, et on les obtient l'un et l'autre par l'exercice et la pratique. L'heureux développement des qualités physiques produit généralement un heureux équilibre dans le domaine moral: *Mens sana in corpore sano*, disaient les anciens. クーベルタンはその後、「燃えさかる精神は強靱な肉体に宿る」 *mens fervida in corpore lacertoso* という標語をラテン学者のモルレの助言をもとに採用した。医学的な意味での健康という意味にもとれる *mens sana in corpore sano* ではなく、よりスポーツに特化した言葉、オリンピズムにふさわしい言葉を求めてのことであった。*Mens fervida in corpore lacertoso* という標語の誕生については、Anonymous (1911) 99-100 を参照。*Revue Olympique* に掲載されたこの論考には著者名は記されておらず、また本文中にクーベルタンの名は 3 人称で語られているが、一般に著者はクーベルタン本人であろうと推測されている。

4 厚生労働省による翻訳：『平成 26 年版 厚生労働白書』第 1 部「健康長寿社会の実現に向けて～健康・予防元年～」2 ページ (<https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/14/dl/1-00.pdf> [2021 年 2 月 8 日最終閲覧])。日本 WHO 協会による世界保健機関憲章前文の翻訳：<https://japan-who.or.jp/about/who-what/charter/> (2021 年 2 月 8 日最終閲覧)。

IOC と WHO の憲章において、類似の表現が用いられているのは単なる偶然ではない。いずれも啓蒙主義時代以来、欧米において繰り返し使われてきた「健全な肉体に健全な精神が宿る」*mens sana in corpore sano* という句を翻訳・翻案した形で生き方、そして健康の定義が語られているのである。そして、この「健全な肉体に健全な精神が宿る」という句は、国内外の教育の場で今日まで繰り返し使われている。

*Mens sana in corpore sano* というラテン語の原句がもともとローマ帝政期の風刺詩人ユウェナリスの詩句 (10. 356) に由来すること、詩の主題は欲深い人々に対する風刺であり、件の句は文脈とは無関係に切り取られたに過ぎないということは、現在ではよく知られている<sup>5</sup>。しかしながら、この句は、長年にわたって、古代ギリシアの教育観を代弁するものと解釈され、さらにその理想を体現したのが古代の競技祭、とりわけ古代オリンピックの勝者だと考えられてきた。近代に発展したスポーツ観の起源を古代ギリシアに求め、古代ギリシアと近代とを結びつけるにあたって、その精神を簡潔かつ的確に表現した句ととらえられ、繰り返し引用されてきたのである。

近代以降に多用された「健全な肉体に健全な精神が宿る」という考え方においては、先に引用したクーベルタンの言葉に見られるように、肉体と精神の関係において肉体が上位におかれている。古代の教育観を代弁したものととらえられているが、そもそも古代においてそのような考え方は存在したのだろうか。本稿では、まず古代ギリシアにおけるオリンピックの位置づけについて概観した後、若者教育に焦点を当て、その実態と変遷について論じることから、古代における教育の実践と性格と考察する。その後、近代西欧における教育論、とりわけスポーツ教育論の中で、古代の教育論がどのように参照され、そして「健全な肉体に健全な精神が宿る」という思想として定着してきたかを考えてみたい。

5 日本語の種々のウェブサイトでも触れられている。一例としてウィキペディアの日本語版の「ユウェナリス」の項目をあげておく (<https://ja.wikipedia.org/wiki/ユウェナリス> [2021年2月8日最終閲覧])。また、ロックの『子どもの教育』(原題 *Some Thoughts Concerning Education*) の翻訳者、北本正章の該当部分の訳注 (298-299 頁) を参照。北本訳については、本稿 4 および註 44 を参照。

## 1. 古代ギリシアにおけるオリンピックの位置

### 1.1 オリンピックの位置

ポリスをはじめとする数多くの政治共同体から成り立っていた古代ギリシア世界において、政治的にそれぞれが独立していても同じギリシア人だと意識できるのは、ヘロドトスによれば、血縁関係と言語、信仰、生活様式が共通していることだった<sup>6</sup>。オリンピック（オリンピア祭）、ピュティア祭、イストミア祭、ネメア祭の4つの全ギリシア的祭典は、実際にこれらを体験し享受する場所でもあった。その一方、ギリシア世界に共通の暦というものは存在しなかった。それぞれが政治的に独立した共同体であったからである。前5世紀後半ころより多くのポリスで紀年の役職者名を使って特定の行政年をあらわし、それを記載するようになって、外交文書において共通の暦が使われることはなく、双方の暦が併記されるというのが通例であった<sup>7</sup>。

前400年ころにエリスのヒッピアスが歴代のオリンピック競技の勝者の一覧をつくと、やがてスタディオン走（短距離走）の勝者の名前がギリシア共通の年を示す指標として採用されるようになった。いわゆるオリンピア紀（*Olympias*; 英語: Olympiad）である。オリンピア紀とローカルな暦を対照すれば、それぞれのポリスの記録の絶対的な年を知ることが可能になるわけで、行政文書に採用されることはなかったものの、普遍的な叙述・記録に便利なものとして古代の著述家の間に普及していった<sup>8</sup>。オリンピックの勝者が全ギリシアの暦の指標とされたということは、古代ギリシア人にとってオリンピックが特別なものであったことを端的に示している。ヒッピアス以後、オリンピックの勝者の一覧を編纂する作業は引きつがれ、その様式も急速に標準化されていった<sup>9</sup>。

6 Hdt. 8.144.2. このフレーズをめぐる議論については、師尾（2016）11-12を参照。

7 碑文史料を中心に数多くの事例はあるが、ここでは、ペロポネソス戦争の開戦時期をめぐるトゥキュディデスの表記を一例として挙げておく。彼は、前431年の開戦について、「アルゴスではクリュシスが神官職48年目、スパルタではアイネシアスがエフォロスの年、またアテナイではピュトドロスがアルコンの任期終了2ヶ月前に」と記した(Thuc. 2.2.1[翻訳は筆者])。

8 オリンピア紀の成立と普及についての包括的な研究は、Christesen (2007)を参照。

9 たとえば哲学者のアリストテレスは、歴史家カリステネスとともにデルフォイのピュティア祭の勝者および祭典の世話役と役職者の一覧を整理して編纂したことで、デルフォイの神聖同盟から顕彰を受けた(CID 4. 10, 前337-327年ころ)。文献史料からは、アリストテレスが

一方、勝者に植物冠のみが与えられたことで「冠の競技祭」とよばれる上記の4大祭典ですら、そこでおこなわれる競技は共通するものもあれば、異なるものもあった。スタディオン走のおこなわれたスタディオンの長さもまた統一されていなかった。オリンピアでは192メートル強だった1スタディオンの距離は、ピュティア祭の地デルフォイでは178メートル弱であった。各ポリスが政治的に独立していたように、各地の競技祭の競技内容もさまざまであった。時代によって変容もした。ローカルな競技祭でおこなわれていた競技が、遅れてオリンピックに採用されたと思われる事例すらあった<sup>10</sup>。オリンピックが突出していたことはたしかであったが、その一方、この多様性こそが古代ギリシアにおけるスポーツ競技祭の特徴をあらわしていたとも言える。

こうした多様な競技祭の中で、それでも古代ギリシア人にとってオリンピックが突出した存在であったことは、たとえば前480年のオリンピックに関するヘロドトスの叙述からもうかがえる。この年のオリンピックは、テルモピュライの戦いのさなかにおこなわれた<sup>11</sup>。大勢のギリシア人がオリンピックを見るためにオリンピアに集まっており、その競技祭では選手は金品のためではなく榮譽のために競っているという状況は、ペルシア人には理解不可能なことであった<sup>12</sup>。

一方、先述したように、古代ギリシアで開催されたスポーツ競技祭はオリンピックにとどまらない。オリンピック（オリンピア祭）、ピュティア祭、イストミア

---

オリンピック勝者のリストを編纂していたことも知られている（Christesen [2007] 170-173）。さらにアテナイでは、前3世紀前半、オリンピックの歴代の勝者を刻んだ石碑が建立された（IG II<sup>2</sup> 2326 = FGH 416 F6）。断片的ながら、オリンピア紀を使って勝者が記載されていることがわかる。リカヴィトス山の南麓から発見されていることから、キュノサルゲスのギュムナシオン（体育教練場）に建立されていたと一般に考えられている。IG II<sup>2</sup> 2326の新校訂についてはEbert（1982）を参照。キュノサルゲスと距離的にも近いリュケイオンに建立されていた可能性とアリストテレスの編纂したリストとの関係についてはChristesen（2007）206-207を参照。

- 10 武装競走（*hoplitodromos*）がオリンピックの競技に加えられたのは前520年とされる。一方、前520年よりも前から、武装競走の描かれたパンアテナイア祭の賞品アンフォラが存在していたことから、オリンピックの競技となる前からパンアテナイア祭の競技に加えられていたことがわかる。Neils（2004）46を参照。
- 11 Hdt. 7.206. スパルタはスパルタでおこなわれるカルネイア祭のために、他の同盟諸国はオリンピックのために十分な軍を派遣できなかった。なお、ここから、テルモピュライの戦いは、前480年8月末から9月におこなわれたと推測されている。サラミスの海戦は同年9月におこなわれた。How and Wells（1912）224を参照。
- 12 Hdt. 8.26.



祭、ネメア祭の4つの全ギリシア的な「冠の競技祭」は言うまでもなく、そのほかにもそれぞれのポリスの聖域で開催された大小様々な競技祭が存在した。「冠の競技祭」に参加した選手の数、競技祭の規模、競技の数、そして競技場までの移動距離から言っても、実際にはきわめて限定的であったと思われる。大部分のギリシア人が参加する機会を得たのは、自身の所属するポリス内部で開催された、規模も競技も創設時期もさまざまなローカルな競技会であった。アテナイについて言うなら、多くの市民が生涯のうちに参加の機会を得たのは、パンアテナイア祭をはじめとするローカルな祭典における部族対抗競技であった。若者によるチーム競技、部族対抗競技には相当数が参加したと推測できる<sup>13</sup>。市民としてのあるべき姿を示す場となり得たのは、「冠の競技祭」よりもむしろこうしたローカルな競技祭であった。

## 1.2 オリンピック勝者の位置

「冠の競技祭」の場合、競技祭で勝者に提供されたのは、植物冠のみであった。しかし、本国にもどれば、勝者はさまざまな特権を得た。たとえばアテナイでは、軍功を挙げた軍司令官と同様に、劇場での優先席 (*proedria*)、プリュタネイオン (迎賓館) での食事提供 (*sitesis*) などの特権を生涯にわたって享受したことが知られる<sup>14</sup>。市民がこれらの特権を授かることはきわめて例外的なことであり、「冠の競技祭」の勝者の地位がそれだけ特別なものであったことを示している。一方、オリンピックの勝者となったアテナイ人の存在が知られているにもかかわらず、この特権の享受者として史料に出現するのは軍司令官や弁論家が大部分で、競技祭の勝者の名が挙げられた例はない。このことは、競技祭で勝利したことが政治あるいは軍事に関する活動に結びつくものではなかったことを暗に示唆して

13 本稿 3.2 を参照。アリストファネス『蛙』において、「のろまで生白く太った男」がパンアテナイア祭の松明競走で最後尾を走っていたことが面白おかしく語られていることも、競技祭参加者の裾野の広さをほのめかしていると言える (Ar. Ran. 1090-1093)。

14 現存部分が断片的なため、個々の解釈には異論がある。それでも IG I<sup>3</sup> 131= AIO 1137 において、「冠の競技祭」の勝者にはプリュタネイオンで食事の提供を受ける特権が与えられたことは疑いがない (12-18 行)。「アリストファネス『騎士』(前 424 年上演)においてピュロス海戦で功績を挙げたクレオンが迎賓館での食事の権利を獲得したことが繰り返し取り上げられていることから、この民会決議の成立年代もこのころだと考える研究者が近年多い (Rivolta [2014]; Blok - Van't Wout [2018])。決議を刻んだ石工の活動時期もこの解釈と矛盾しない (Tracy [2016] 113-120, esp. 115 参照)。

いるようにも見える<sup>15</sup>。

このような特権が競技祭の勝者に与えられたことについての批判も、古くから存在した。アルカイック期の哲学者コロフォンのクセノファネスは、優先席を与えられ、公費で食事を供される価値などオリンピック勝者にはないと語り、「すぐれた知恵 (*sophia*) より体力を尊ぶのは正しいことではない」と語る<sup>16</sup>。同様の議論は、古典期にも散見されるが、なかでもアテナイの弁論教師であったイソクラテスは、繰り返しこの問題に言及している。『民族祭典演説』の冒頭、および書簡8において、「運動競技で活躍した者を大きな褒美で報いることを当然として、知恵や刻苦勉励によって有用な発見をした人を顧みない国々のあることを不思議に思っています」と記し、さらに『アンティドシス』において、「魂 (*psyche*) が身体 (*soma*) よりも貴いものであることを認める一方で、そのように認識していながら、知恵を求める者 (*philosophountos*) よりも身体を鍛錬する者 (*gymnazomenos*) を歓迎する」風潮があると述べ、「身体の良いことによって、いまだかつて国家が有数のはたらきをなしたことはな」と断じている<sup>17</sup>。オリンピックをはじめとするスポーツ競技祭の勝者の中に「健全な肉体に健全な精神が宿る」という理想は見いだされていなかったのである。魂 (精神) は身体の上位にあると考えられていた。それでも、イソクラテスは、教育には二種類あり、一つは魂の育成、すなわち哲学であり、もう一つは身体を鍛錬、すなわち体育だと語る<sup>18</sup>。その実践の場がギムナシオンであった。

15 アテナイにおいて *sitesis* の権利を獲得したことが知られている人物の一覧は、Osborne (1981) 159-160 を参照。イソクラテスによれば、アルキビアデスは、往々にして微賤の生まれであったり貧しい教育しか受けていなかったりしたため、運動競技選手を見下していたという (Isoc. 16.33)。彼自身は競走馬の飼育をおこない、前 416 年のオリンピックの 4 頭立て戦車競走で勝利した。アルキビアデスは、軍事遠征の司令官として最適者であることを主張するためにこの勝利を強調したが、強調点は私財を惜しみなく供出してボリスに名誉をもたらしたことにあった (Thuc. 6.16.2; Plut. *Vit. Alc.* 11; Isoc. 16.32-34)。アテナイに限らず、オリンピック勝者の他分野での活躍の事例がほとんど知られていないという現実を取り上げた論考として Young (2005) がある。

16 Fragment 2, esp. 13-14. クセノファネスをはじめ、古代の哲学者によるオリンピック批判の事例とそれをめぐる議論については、納富 (2016) を参照。

17 Isoc. *Paneg.* 1; *Letter* 8.5; *Antid.* 180-182, 250. 引用部分は、それぞれ *Letter* 8.5 と *Antid.* 250。翻訳は小池澄夫訳『イソクラテス 弁論集』(京都大学学術出版会)による。

18 Isoc. *Antid.* 180-182. 哲学も体育も技術 (*techne*) だと述べている点で、彼の哲学の捉え方はプラトンとは異なるが、ここでは立ち入らない。



## 2. ギュムナシオンという場

古代ギリシア世界において、市民の身体鍛錬の場となったのは、ギュムナシオン (*gymnasion*, 体育教練場) とよばれる公共の施設であった。自由人男性であれば、だれもが使うことができた<sup>19</sup>。

ギュムナシオンという呼称は、「裸」を意味するギリシア語の *gymnos* に由来する。ギリシア世界においていつごろからギュムナシオンがつくられるようになったのかは明らかではないが、前6世紀には、オリンピアをはじめとする全ギリシア的祭典がおこなわれた聖域の付属施設として存在していたことが知られる。ただし、初期のギュムナシオンは、必ずしも構造物をとまなうものではなかった。ヘレニズム時代までには施設の構造もおおまかに標準化され、ギュムナシオンには、ランニングのためのドロモス (*dromos*)、レスリングのトレーニングのためのパライストラ (*palaistra*)、そのほか着替えや水浴の設備がつくられた。このころにはギュムナシオンとパライストラの語はほとんど同じ施設を指す言葉ともなった。

ギュムナシオンは、聖域の付属施設としてだけではなく、都市の施設としても普及してゆき、競技祭の会場として利用されるだけではなく、日常的な体育教練場としても使われた<sup>20</sup>。アテナイでは、前5世紀末には、すでにアカデメイアとリュケイオンにギュムナシオンが存在していたことが知られている<sup>21</sup>。そして少なくともこのころには、ギュムナシオンは単に体育教練場としてのみならず、年長者と年少者が集い議論を交わす場としての役割も担っていた。プラトンの『リュシス』の冒頭には、アテナイの市壁の郊外をアカデメイアからリュケイオンに向かって歩いている途上、ソクラテスが若者に誘われて近くのパライストラをおとずれたことが描写されている。若者たちはパライストラでは今現在議論がおこなわれているのだとソクラテスに説明し、ソクラテスにもその議論に加わるよう誘った

---

19 Aisch. *In. Tim.* 138.

20 ギュムナシオンの概要については、Pleket (2014)、Scott (2014) および Petermandl (2014) を参照。

21 前4世紀に創設されたプラトンとアリストテレスの学園は、それぞれアカデメイアとリュケイオンのギュムナシオンに附属する形でつくられた。

のである<sup>22</sup>。ギムナシオンあるいはパライストラは、身体鍛錬の場であると同時に、年長のソフィストラが訪れて青少年を導く場でもあった。『リュシス』のほか、『ラケス』、『エウテュデモス』の舞台設定がギムナシオンあるいはパライストラにおかれていることは、ソクラテスの活動の場の多くがこれらの場にあったことを示唆している。

ギムナシオンは、上述したように、自由人の男性のみが出入りする場であった。アイスキネス『ティマルコス弾劾』(前345年)に挿入された法文条項には、ギムナシオンおよび体育教練役(*gymnasiarches*)についての記載があり、少年たちが体育教練役の監督の下に身体トレーニングを受けていたことが示されている<sup>23</sup>。さらに、ギムナシアルコス(*gymnasiarchos*)に関する規定の詳細を記した前2世紀のギリシア北部ペロイア出土の碑文からは、ギムナシオンに入ることができたのは、30歳までの自由人男性と限定され、奴隷や解放奴隷、交易商人、男娼、泥酔者、精神異常者、(レスリング)競技不能の者は入場を禁じられていたことが知られる<sup>24</sup>。ペロイアの規定によれば、ギムナシアルコスは単なる体育教練役ではなく、ギムナシオンを取り仕切る監督者であった<sup>25</sup>。時代も場所も異なるので単純な比較はできないが、ギムナシオンは古典期からヘレニズム時代まで、体育教練場としての役割と年長者が年少者に知識を教授する場としての役割を有していた。ただし、古典期アテナイのギムナシオンやパライストラにおける教育は私的なものであって、制度化されたものではなかった。名目上、すべて

22 Pl. *Lysis* 203a-206e. 『リュシス』の舞台は前400年頃と考えられている。

23 Aisch. *In Tim.* 12. 古典期のアテナイにおいては、ギムナシアルコスは1年任期で、公共奉仕の一つであった(And. 1.132; Dem. 20.21)。ギムナシアルコスの任務は、競技奉仕者として松明競走のトレーニングを請け負うことであった。

24 SEG 43.381 (前168/7年以後)。ヘレニズム時代に入ると、各地でギムナシオンにおける教育が制度化された。ペロイア出土のこの碑文は、ポリスによるギムナシオンの管理に関わるものである。SEG 43.381, 22-24では、ギムナシアルコスは30歳以上の者から選出されるべきことが規定されている。このこともまた、身体訓練を日常的におこなっていたのは、市民として政治に積極的に参加するようになる前の30歳以下の若者であったということを示唆している(Gauthier - Hatzopoulos [1993] 参照)。なおジョヴァンニニは、2004年の論考において、30歳以上の市民も異なる時間帯に利用を許されていたという新しい解釈を示している(Giovannini [2004] 475-477, esp. 477)。それでも30歳以下と30歳以上の市民の間に区別がなされていたことは注目される。

25 SEG 43.381, 24-40. Gauthier - Hatzopoulos (1993) 53-57 参照。ギムナシアルコスは、ギムナシオンの支配者という意味である。ギムナシアルコスは、ギムナシオンの監督とともに施設の維持管理のために私財を供出し、それにより顕彰された。

の自由人が利用できるとは言え、下層階級に属する人々が参加する機会はほとんどなかったと推測できる。市民教育を制度化して、全市民に機会を提供したのが、前4世紀後半にアテナイで成立したエフェベΙΑ制度であった。

### 3. 若者教育とスポーツ

#### 3.1 アテナイにおける若者教育の制度エフェベΙΑ *ephebeia* の成立

エフェベΙΑ (*ephebeia*) という言葉は、現存史料から知られるかぎり、前4世紀以前には使われていなかった。エフェベΙΑは、エフェボイ (*epheboi*; 単数は *ephebos*) とよばれる18歳および19歳の若者の集団訓練をあらわす言葉で、きわめてテクニカルな言葉である。*Ephebos* という語も同じく前4世紀以前には知られていない。*Ephebos* という単語は、ἐπίとῥβηから構成され、「ῥβηにある者」すなわち若者を意味することから、子ども (*pais*) と大人との中間的な存在としての思春期の若者をさす一般的な単語であるとも考えられてきた。しかしながら、前4世紀以前の事例が知られないということ、それ以前には別の言葉で若者が表現されていたことを鑑みるなら、若者教育の制度との関連で生まれた言葉だと考えた方がよいと思われる<sup>26</sup>。ペリクレスの葬送演説において、アテナイはスパルタとは異なり、幼少期から集団的な訓練がおこなわれることはないと言われていることも、制度としての若者教育が前430年の時点で存在していなかったことを示している<sup>27</sup>。

---

26 *Ephebeia* および *ephebos* の語源をめぐるのは、長い研究史がある。少年から大人への通過儀礼との関連から *ephebeia* を解釈し、*ephebos* を思春期の若者を指すととらえるヴィダル＝ナケの解釈は、今なお多くの研究者に受け入れられている。その一方、前4世紀以前の事例が知られないことから、一般名詞ではなくテクニカルタームだとする研究者も少なくはない。文化人類学的な視点から通過儀礼の若者ととらえる考え方は、それ自体が後世の事例からの類推に過ぎないと批判し、ヴィダル＝ナケの解釈を否定する。語源をめぐる研究史と議論については、Vidal-Naquet (1986); Chankowski (2014a) 45-142 および Henderson (2020) 3-35 を参照。

27 Thuc. 2.39.1. ただし、正式な制度ではないものの、エフェベΙΑに準ずる制度が古くから存在していたと考える研究者は多い。とくにケネルは、アイスキュロスとトゥキュディデスに、前4世紀の「エフェボイの誓い」の文言との類似が見られることから、前6世紀にまでさかのぼる可能性を示唆する (Kennell [2013])。そこまでさかのぼらなくとも、Aeschin. *In Tim.* 49 および 2.167 の記述から、大部分の研究者は、前4世紀前半には何らかの制度が存在していたと考えている。Reinmuth (1971) 123-138; Habicht (1997) 16-17; Chankowski

アテナイにおいて、エフェベイアがポリスの制度として確立したのは、前 330 年代半ばのことである。エピクラテスの提案した「エフェボイに関する法」によって、エフェベイア制度がつくられたと伝えられる<sup>28</sup>。伝アリストテレス『アテナイ人の国制』42 章 2-5 節に記された制度についての説明は、この時に成立したものをまとめたものと考えられている。

『アテナイ人の国制』によれば、アテナイにおいては 18 歳になり市民権登録された若者たちは、エフェボイすなわち見習い兵となり、2 年間の集団訓練にいそしんだ。1 年目は各地の神殿を巡拝した後、ペイライエウスの守備に配備される傍ら、その場で重装歩兵としての訓練および武器の使い方の訓練を受けた。2 年目に入ると、劇場で民会が開催された際に隊列を組み、訓練の成果をそこで披露した<sup>29</sup>。エフェボイには、このとき国家から楯と槍を供与された。彼らは、その後、アッティカの国境防衛の任務に就いた。訓練を終え、20 歳になると、正式に市民団に組み込まれ、重装歩兵としての活躍を期待された。

記述からは、第一に、市民権登録された 18 歳の若者すべてが集団訓練に参加したように見える。2 年目に楯と槍を与えられていることから、あくまでも重装歩兵身分以上だと考える研究者が多いが、文章上からそれは読み取れない。実態がそうであったであろうことは現存するエフェボイの一覧を刻んだ資料からも推測されるが、規定上は全員の参加をうたっていると読むべきだろう<sup>30</sup>。むしろそ

---

(2014b) 17-22 を参照。とくに Chankowski (2014b) は、Reinmuth (1971) no.1 = *SEG* 23.78 = *AIO* 1968 を再校訂し、前 335 年以前に規律監督官 (*kosmetes*) が存在していたと述べ、エフェベイア制度の成立が前 335 年よりも古い可能性を示唆する。この論争についての研究史については、Friend (2019) 15-33 および Henderson (2020) 36-55 を参照。両者ともに、エフェベイア制度は前 335 年ころまで存在しなかったと結論する。筆者も彼らの解釈に近い考え方をしている。この問題については、別稿で取り扱いたい。

28 Harp. s.v. *Epikrates* = Lycurg. fr. 5.3. エピクラテスが法を提案したのは、一般に前 335/4 年ころと考えられている。Rhodes (1993) 494 およびアリストテレス・橋場・國方 (2014) 223 を参照。また、エフェボイによる奉納記念碑の建立の初出が前 330 年代半ばであることもこのことを示唆している。

29 *Theatron* と書かれた場合は、一般にアクロポリスの南麓のディオニュソス劇場と考えられている。Dillery (2002) は、劇場では集団で隊列の披露をおこなうには狭すぎると考えられることから、この *theatron* は前 330 年代につくられたパンアテナイア祭のスタディオンであったと推測している。

30 いわゆるソロンの改革によって成立した財産高による 4 身分のうち最下層に当たるテーテス身分の人々の政治参加の度合いの現実をめぐるのは、長い論争がある。テーテスはエフェボイとして訓練に参加しなかったという考え方については、Rhodes (1993) 503 および

のように主張することに意味を見いだしていたようにも見える。

第二に、アテナイでは、エフェベΙΑ制度の成立によって、はじめて公的資金に裏付けされた若者の教育システムがつくられたということである。エフェボイの教育のために選出された訓育官 (*sophronistes*) とエフェボイは、公費で手当支給を受けた<sup>31</sup>。全員参加を可能にする仕組みである。

第三に、エフェベΙΑ制度とは、一見すると、軍事訓練に重きを置いた兵役奉仕のように見える<sup>32</sup>。だが、彼らの教練役として、まず訓育官 (*sophronistes*) が各部族1名ずつ選ばれていること、さらにエフェボイ全体の規律を統括する規律監督官 (*kosmetes*) が1名選ばれていること、その後で専門的な体育教練役 (*paidotribes*) と戦術を教える教官 (*didaskalos*) が選ばれていることから、エフェボイの教育の根幹に自制心 (*sophrosyne*) を育成するということがあったことが読み取れる。エフェボイの訓練が各地の神殿を巡拝した後にはじめられたことも、単なる軍事訓練ではなかったことを示している。市民の素養として *sophrosyne* を身につけさせ、同時に市民として必要な軍事技術を身につけさせるという両面からの教育を公的な制度としたものがエフェベΙΑ制度であったのである。訓育官が部族から選出され、部族のエフェボイの教育を担当しているのに対して、体育教練役や他の軍事技術を教授する教官がポリス全体から選ばれていることも、エフェベΙΑという制度の性格をあらわしている。エフェボイが訓練を終えた後に出された顕彰決議においては、賞賛の理由に秩序の正しさ (*eutaxia*) や規律遵守 (*kosmiotes*) が挙げられているものがある一方、徳 (*arete*) と自制心 (*sophrosyne*) が顕彰理由にあげられているものがあることも注目される<sup>33</sup>。

---

Burckhardt (1996) 33-43 を参照。現存のエフェボイの一覧に刻まれた各部族のエフェボイの数の合計数は、500 人程度であり、このことも現実には全員が参加したわけではなかったことの証左だと考える研究者も多い。一方、エフェボイの誓いについて触れたリュクルゴスも、市民全員 (*pantes hoi politai*) が宣誓したと語っている (Lycurg. 76)。少なくとも理念的には全市民が参加できた可能性については、Prichard (2016) を参照。

31 [Arist.] *Ath. Pol.* 42.3.

32 制度の創設時期がカイロネイアの戦いの敗戦によりギリシア世界がマケドニアの支配下におかれ、さらに前 335 年にアレクサンドロスによってテーベが破壊された時期と重なることから、国防強化のために創設されたと一般に解釈されている。アカルナイで発見されたいわゆる「エフェボイの誓い」(RO 88; 日本語訳は歴史学研究会編 [2012] 142 番) の文言の下部には、ペルシア戦争時の誓いの文言が刻まれていることから、エフェベΙΑ制度が軍事訓練に重きを置いた兵役奉仕の制度であると考えられる証左ととらえられることも多い。

33 *Arete*: Reinmuth (1971) no.5 = Friend (2019) T6 = IG II<sup>3</sup> 4 337; Reinmuth (1971) no.8 =



### 3.2 エフェボイの競技祭参加

史料は少ないながら、エフェボイがその訓練中に、競技祭に参加していたことが知られる。スキラ祭ではエフェボイはブドウの実のついた枝を持って競走をおこなったと伝えられている<sup>34</sup>。競技祭における松明競走に優勝したエフェボイが感謝の奉納をおこなった例も知られている<sup>35</sup>。訓育官および松明競走の世話をしたギュムナシアルコイもエフェボイとともに感謝奉納をおこなった<sup>36</sup>。松明競走は、部族単位でリレーがおこなわれ、火を消さずにリレーでつなぎゴールすることが求められた。個人競技のみで構成されていた「冠の競技祭」とは異なり、こうしたチーム競技は、ポリスの祭典に特徴的なものでもあった。古典期においては、市民のみが参加できる競技であった<sup>37</sup>。

4年に一度大祭のおこなわれたパンアテナイア祭では、数多くの部族競技が実施され、それらは年齢によってグループ分けされていた<sup>38</sup>。その年のエフェボイがパンアテナイア祭に参加していたかどうかについては、前4世紀については明確な史料はないが、こうした部族競技に参加した可能性もある。エフェボイの宗教祭典への参加は、パンアテナイア祭に限らず、前3世紀末以降にはよく知られている<sup>39</sup>。古典期の事例が少ないのは、史料の記載の特徴によるのか、それともそもそも参加していなかったためなのか、現時点では不明である。

### 3.3 ヘレニズム時代以降のアテナイのエフェベイア制度とギリシア世界への拡散と普及

前330年代半ばに成立したエフェベイア制度は、アテナイがマケドニアの支配下におかれていた前322年から前307年にかけてどのような状態にあったのか判

---

Friend (2019) T7 = *IG II<sup>3</sup> 4 334. Arete + sophrosyne*: Reinmuth (1971) no.9 = Friend (2019) T9.

34 *FGH* 328 F15. = *Ath.* 11.495e.

35 Reinmuth (1971) no.13 = Friend (2019) T10 = *IG II<sup>3</sup> 4 336*; Reinmuth (1971) no.6 = Friend (2019) T12 = *IG II<sup>3</sup> 4 335*.

36 ギュムナシアルコイ（単数：ギュムナシアルコス）の松明競走での役割については、註23を参照。

37 「冠の競技祭」が個人競技に限定されていたことと、ローカルな祭典における部族競技、集団競技の存在との対比については、Miller (2004) 114-129を参照。

38 年齢別のグループについては、*IG II<sup>2</sup> 2311, 72-74*（前4世紀前半）を参照。

39 Henderson (2020) 227-256.

明しない。前 307 年に民主政が復活すると、まもなくエフェベΙΑ制度も復活したが、この時改革がおこなわれ、訓練期間は 2 年間から 1 年間へと半減した<sup>40</sup>。公費の供出もなくなり、エフェベΙΑへの参加も義務ではなくなった。参加者の人数は減少し、500 名ほどだった参加者は、100 名程度にまで落ちた。市民全員が参加するエフェベΙΑから、希望者のみが参加する、すなわち富裕者の子息がもっぱら参加するエフェベΙΑへと性格を変えていった。さらに訓練の内容も大きく変わってきた。身体鍛錬以上に哲学教育が重要視されるようになった。また上述したように、エフェボイの宗教祭典への参加、とりわけ競技への参加が制度の中に組み込まれるようになった。目に見えた軍事訓練はおこなわれなかったにせよ、競技祭への参加は身体鍛錬の動機になったはずである。同時に競技祭への参加は、ポリスの歴史や文化の理解の場ともなった<sup>41</sup>。

エフェベΙΑ制度の変革の背景には、マケドニア支配下のアテナイにおける政治的経済的困難があったことは疑いないが、エフェベΙΑを終えた若者たちに対する顕彰決議、およびエフェボイによる感謝の奉納は継続された。一方、前 2 世紀末から、エフェボイの一覧に非アテナイ人の名前も散見されるようになる。このころまでには、アテナイのエフェベΙΑ制度は、完全に富裕者の子息のためのものへと変容した。

ヘレニズム時代以降、エフェベΙΑ制度はアテナイ以外のポリスにおいても知られるようになる。状況証拠からの推測にとどまるものの、アテナイ外部のエフェベΙΑ制度はアテナイの制度を模倣してつくられたものと考えられている。アテナイとの距離も近く、また関係も深いエレクトリアにおいて前 4 世紀末にエフェベΙΑ制度が存在していたこともこのことを示している<sup>42</sup>。制度の名称こそさまざまではあったが、エフェベΙΑ制度はヘレニズム時代の中に、ほとんどすべてのギリシア世界に拡散していった<sup>43</sup>。

40 Reinmuth no.17 = IG II<sup>2</sup> 478 (前 305 年) 以降、エフェボイの訓練が 1 年に変化している。ヘレニズム時代におけるエフェベΙΑ制度の変化については、Friend (2019) 172-184 および Henderson (2020) chs. 7, 8 を参照。

41 ヘレニズム時代のアテナイにおけるエフェベΙΑについては、Perrin-Saminadayar (2007) を参照。

42 IG XII 9 191.

43 バロイアのギュムナシオンについては註 24 を参照。

#### 4. 西欧における古代ギリシアの教育論の受容とスポーツ教育のモットーとしての「健全な肉体に健全な精神が宿る」の普及

*Mens sana in corpore sano* が、心身の健康という意味で使われるようになったのは、少なくとも英語圏では17世紀はじめころからであったとされる<sup>44</sup>。しかしながら、子どもの教育の必要性和子どもの教育における身体鍛錬と学習との両輪の必要性については、すでにルネサンス期の著作に論じられていた。プルタルコス『子どもの教育について』のラテン語訳 *De liberorum educatione* が1411年にグアリーノ・ダ・ヴェローナ (Guarino da Verona) によって出版されると、まずはイタリアにおいて子どもの成長と教育についての関心が高まった。教育論の中には、マッフェオ・ヴェジオ (Maffeo Vegio) の『子供の教育について』 (*De educatione liberorum*) のように、男児だけではなく女兒に対する身体鍛錬の必要性について論じたものすらあった。ルネサンス的な教育論は、ギリシア語古典の翻訳の出版と並行して各地に広がっていった<sup>45</sup>。この段階では、身体鍛錬とオリンピックとの関連は見当たらない。

---

44 Knowles (2016) s.v. *mens sana in corpore sano*. 初出については、管見の限り不明だが、1693年に出版されたジョン・ロックの『教育に関する考察』第1巻第1節は、「健全な身体に宿る健全な精神とは、この世における幸福な状態の、手短かではありますが意をつくした表現です」(A sound mind in a sound body, is a short, but full description of a happy state in this world) という文ではじまる(翻訳は服部知文訳『教育に関する考察』岩波文庫による。なお北本正章訳『子どもの教育』では「健全な精神が宿れかし健康な身体に」と訳している。ユウエナリスの原詩とともにロックの教育観を反映した翻訳と言えるが、翻訳そのものとしては、「宿れかし」という解釈まで入れなくてもよいとも考える。むしろロックのストレートな表現が、その後の医学者、スポーツ教育者による皮相な解釈につながった可能性もあろう。北本の解釈については、北本(2011) 298-299を参照。北本訳の存在を教えてくれた沖塩有希子氏に感謝する)。

さらに、ピューリタンの聖職者にして著述家でもあったコットン・マザーが1698年にボストンで出版した冊子のタイトルは、『健全な身体に健全な精神が宿る－病からの回復についての論』(*Mens Sana in Corpore Sano: a Discourse upon Recovery from Sickness*) であった。彼は、第二の見解の章において、「精神の病は必然的に身体の病をひきおこす」(A sickness in the spirit, will naturally cause a sickness in the body) とも記している (Mather [1698] 24)。

45 ルネサンス期における教育およびスポーツに関する書物の出版については、McClelland (2007) 50-52 および Lacouture (2019) を参照。

イギリスにおいては、1612年にいわゆるコッツウォルド・オリンピック (Cotswold Olympicks) においてはじめてスポーツ・レクリエーションにオリンピックという言葉が用いられた。

1749年にギルバート・ウェストがオクスフォード大学に提出した学位論文は、古代オリンピックについての最初の包括的な研究である<sup>46</sup>。ウェストは、市民による身体鍛錬は軍事訓練につながるものであってギリシアの自由を守るためのものであり、身体の卓越性を求めることはオリンピックでの栄冠につながるものだと論じた。さらに、*mens sana in corpore sano* という句こそ用いていないが、身体鍛錬は健康と活力とを促進し、危険な病気にかかることを防ぎ、怠惰や贅沢すなわち政治社会腐敗、政治分解の病理から遠ざけることになると述べている<sup>47</sup>。古代ギリシアにおけるギムナシオン（体育場）での身体鍛錬とオリンピックの意義とを結びつけた最初の論述だと言える。

*Mens sana in corpore sano* が身体鍛錬、とくにスポーツ教育との関連でさかんに使われるようになるのは、啓蒙主義時代以降、とくに19世紀に入ってからのことであった。19世紀の間にこの句はエリートスポーツ教育との親和性を強め、イギリスでは多くの学校やスポーツ競技会のモットーとして使われるようになった。ロンドンのチェルシーの農場を購入しスポーツクラブを創設したド・ベレンジャーは、著書において、教育において身体のトレーニングと精神の鍛錬の両方が必要だと語り、それを最も明確にあらわしたのが、*mens sana in corpore sano* という格言だと書き記している<sup>48</sup>。ただし、彼の著書からは古代ギリシアとの関連は必ずしも読み取れない。

スポーツ競技およびスポーツ教育のモットーとしての定着に最も強く影

---

46 West (1749). ウェストの学位論文が古代ギリシアの美德をモデルとしたイギリス近代社会の形成をめぐる議論に与えた影響については、Zebrowski (2012) を参照。

47 West (1749) 188-189.

48 De Bérenger (1835) 252. この書籍の出版の前年となる1834年に、彼が制作させた銀製の Chelsea Stadium Shield と刻された丸盾の中央には、「欲する者には何も困難はない。健全な肉体に健全な精神が宿る」(*Volenti nihil difficile. Mens sana in corpore sano.*) という2つのラテン語のモットーが刻された。なお、競技場の英語の呼称にスタジアムという言葉を用いたのもベレンジャーが最初であったと言われる。スタジアム stadium の語は、競技場を意味するギリシア語の *stadion* からとられた。彼は、1832年および1838年にこのスタジアムでオリンピックの開催を試みた。丸楯については、Credland (2006) 180-181 参照。ジョージ・クルックシャンク (George Cruikshank) による丸楯のデザイン画については、同 181 頁、図7および182頁、図8を参照。

響をあたえたのは、19世紀半ばにはじまる「筋肉的キリスト教」(muscular Christianity)の運動であった。運動を通じた心身の美と規律、男らしさを追求する思想は、パブリック・スクールの教育理念として受け入れられるとともに、スポーツ競技会におけるモットーとして急速に普及することになる。*Mens sana in corpore sano*が、古代ギリシアの教育との関連を意識した上でスポーツの場で最初に使われたのは、1850年代にジョン・ハレイが設立した体育場(gymnasium)でつかわれたモットーであった<sup>49</sup>。ハレイは1844年からリヴァプールで体育教室を開いていたが、1850年代に入ってみずからの体育場を創設した。彼自身がこの体育場の監督者に就任したが、監督者の呼称として古代ギリシア語の体育教練役ギムナシアルコス(gymnasiarchos)に語源を持つGymnasiarchという語を使用した。1862年1月には、慈善家のメリイとともにリヴァプール・アスレティック・クラブ(Liverpool Athletic Club)を設立し、1862年からリヴァプール・オリンピック・フェスティバル(Liverpool Olympic Festivals)と題したスポーツ競技会を毎年開催することを決定し、計6回開催した。1865年11月6日には、ハレイを議長として、リヴァプール体育館において、オリンピック協会(National Olympian Association)が創設された。NOAは「市民の力は国家の力(civium vires civitatis vis)をモットーに掲げ、「男らしい身体鍛錬(manly exercise)によって技術と強靱さを奨励し報い」、「卓越した精神(mental excellence)に敬意を表すること」を基本理念とした<sup>50</sup>。イギリスにおけるオリンピック協会の設立は、「オリンピック」(スポーツ競技会)を通じて国民体育教育をめざしたものであった。ここにスポーツ教育を国民教育の根幹に据える考え方をあらわした標語としての*mens sana in corpore sano*が確立することになる。この理念を、一国主義ではなく国際的な運動に高めようとしたのがクーベルタンであった。

49 Polley (2011) 57. この体育場はロタンダ(Rotunda)とよばれていたビリヤードホールの中に設けられた。

50 Polley (2011) 67. ハレイとともに中心的役割を果たしたのは、1850年からウエンロック・オリンピックを開催していた地方判事であり医師でもあったウエンロック・オリンピック・ソサエティの責任者ブルックス(W.P. Brookes)、およびイギリスにドイツ式スポーツ教育を広めたロンドンのドイツ体育協会(German Gymnastic Society of London)の責任者ラーフェンシュタイン(E.G. Ravenstein)であった。オリンピック協会は1883年に解散し、1885年に新たに設立された身体的余暇活動協会(National Physical Recreation Society)に引きつがれた。エリート・アマチュアリズムとプロ参加の是非をめぐる意見対立が原因であった。



理想化された古代ギリシアの市民教育観と近代世界における国民教育(市民教育)の理想と幻影を結びつける言葉が、*mens sana in corpore sano* という句であった。

## おわりに

1912年のストックホルム大会に際して、ゲオルク・パウリ (Georg Pauli) は、*Mens sana in corpore sano* と題した油彩作品を発表した<sup>51</sup>。裸でトレーニングをおこなう若者の背後には、スーツを着て片手に書物を手にした若者が描かれている。富裕なエリートの若者の姿であると同時にオリンピック選手のあるべき姿である。

アテナイにおいては、前 330 年代半ばにエフェベΙΑ制度がつくられるまで、公費で教育するという制度は存在しなかった。それまでは、下層階級の子息は最低限の実際的な教育を受けるのがせいぜいであって、プラトンやイソクラテスが書きあらわしたような教育とは無縁であった。哲学と身体鍛錬とを日常的におこなえたのはきわめて一握りの人々に過ぎなかった。せいぜいローカルな競技祭において、チーム競技に参加する機会を得た程度だっただろう。公費の投入されたエフェベΙΑ制度は、はじめてより幅広い階層の人々が競技祭に参加する道を開いた。エフェボイとして宣誓を行い、神域を巡拝して歴史を学び共有し、身体鍛錬に励み、松明競走ほかの競技に参加する機会を得た。*Mens sana in corpore sano* でくくられる教育が多数の市民に向けて実践された時代は、この古典期の終わりのわずか 10 数年に過ぎなかったのである。パウリの描いたエリートの若者の姿は、実は古代ギリシア世界においても一握りのエリートのみが実践できた姿であった。

## 略号一覧

古典の略号については *Oxford Classical Dictionary* 第 4 版の略号にしたがう。また、古代史・古典学に関する雑誌については、原則として *L'année philologique* の略号にしたがう。

---

51 スウェーデン、マルメ美術館所蔵。Google Art and Culture で公開されている。https://artsandculture.google.com/asset/mens-sana-in-corpore-sano/ywE6dtFhFCGCrw (2021 年 2 月 8 日最終閲覧)。

- AIO *Attic Inscription Online* (<https://www.atticinscriptions.com>) .
- CID *Corpus des inscriptions de Delphes*. Paris. 1977-.
- FGH F. Jacoby, *Die Fragmente der griechischen Historiker*. Berlin 1923-1930, Leiden 1940-.
- IG *Inscriptiones Graecae*. Berlin, 1873-.
- RO P. J. Rhodes and R. Osborne, *Greek Historical Inscriptions, 404-323 BC*. Oxford. 2003.
- SEG *Supplementum Epigraphicum Graecum*. Leiden. 1923-.

### 参考文献一覧

- Anonymous (1911) 'Mens fervida in corpore lacertoso', *Revue Olympique* 67: 99-100.
- Blok, J.H. and Van't Wout, E. (2018) 'Table Arrangement: *Sitêsis* as a Polis Institution (*IG* I<sup>3</sup> 131) ', in Van den Eijnde, Blok and Strootman (2018) 181-204.
- Burckhardt, L. (1996) *Bürger und Soldaten*. Stuttgart.
- Cataldi, S. ed. (2004) *Poleis e politeiai*. Alessandria.
- Chankowski, A.S. (2014a) *L'éphébie hellénistique*. Paris.
- Chankowski, A.S. (2014b) 'L'éphébie athénienne antérieure à la réforme d'Epikratès : à propos de Reinmuth, *Eph. Inscr.* 1 et de la chronologie des première inscriptions éphébiques', *BCH* 138 : 15-78.
- Christesen, P. (2007) *Olympic Victor Lists and Ancient Greek History*. Cambridge.
- Christesen, P. and Kyle, D.G. eds. (2014) *A Companion to Sport and Spectacle in Greek and Roman Antiquity*. Oxford.
- Credland, A.G. (2006) 'Charles Random, Baron de Berenger, Inventor, Marksman and Proprietor of the Stadium', *Arms & Armour* 3-2: 171-191. DOI: 10.1179/174962606X136865.
- De Bérenger, C.R. Lt. Col. Baron (1835) *Helps and Hints How to Protect Life and Property: with Instructions in Rifle and Pistol Shooting*. London.
- De Coubertin, P. (1887) 'L'éducation Anglaise', *La réforme sociale* Janvier-Juin 1887: 632-652.

- Dillery, J. (2002) 'Ephebes in the Stadium (Not the Theater) : *Ath. Pol.* 42.4 and *IG II<sup>2</sup>* 351', *CQ* 52: 462-470.
- Ebert, J. (1982) 'Zur „Olympischen Chronik“ *IG II/III<sup>2</sup>* 2326', *Archiv für Papyrusforschung* 28: 5-14.
- Friend, J.L. (2019) *The Athenian Ephebeia in the Fourth Century BCE*. Leiden.
- Gauthier, Ph. and Hatzopoulos, M.B. (1993) *La loi gymnasiarchique de Beroia*. Athens.
- Giovannini, A. (2004) 'L'éducation physique des citoyens macédoniens selon la loi gymnasiarchique de Béroia', in Cataldi ed. (2004) 473-490.
- Habicht, C. (1997) *Athens from Alexander to Antony*. Cambridge MA.
- Henderson, T.R. (2020) *The Springtime of the People: The Athenian Ephebeia and Citizen Training from Lykourgos to Augustus*. Leiden.
- How, W.W. and Wells, J. (1912) *A Commentary on Herodotus in Two Volumes. Volume II (Books V – IX)*. Oxford.
- Kennell, N. (2013) 'Age-Class Societies in Ancient Greece?', *Ancient Society* 43: 1-73.
- Knowles, E., ed. (2016) *The Oxford Dictionary of Phrase and Fable* (2 ed.). Oxford.
- Lacouture, F. (2019) 'Mens sana in corpore sano: la place du sport et des exercices physiques dans l'éducation des enfants à la Renaissance', *Italies* 23 : 19-34. DOI : <https://doi.org/10.4000/italies.6872>.
- Locke, J. (1693) *Some Thoughts Concerning Education*. London (服部知文訳『教育に関する考察』岩波文庫、1967年。北本正章訳『子どもの教育』原書房、2011年).
- McClelland, J. (2007) *Body and Mind: Sport in Europe from the Roman Empire to the Renaissance*. London.
- Mather, C. (1698) *Mens Sana in Corpore Sano: A Discourse upon Recovery from Sickness: Directing How Natural Health May Be Improved into Spiritual, Especially by Them That Have Lately Recovered It*. Boston.
- Miller, S.G. (2004) *Ancient Greek Athletics*. New Haven and London.
- Neils, J. (2004) 'Replicating Tradition: The First Celebrations of the Greater Panathenaia', in Palagia and Choremi-Spetsieri eds. (2004) 41-51.

- Osborne, M.J. (1981) 'Entertainment in the Prytaneion at Athens', *ZPE* 41: 53-70.
- Palagia, O. and Choremi-Spetsieri, A. eds. (2004) *The Panathenaic Games*. Oxford.
- Perrin-Saminadayar, É. (2007) *Éducation, culture et société à Athènes : les acteurs de la vie culturelle athénienne (229-88) : un tout petit monde*. Paris.
- Petermandl, W. (2014) 'Growing Up with Greek Sport: Education and Athletics', in Christesen and Kyle eds. (2014) 236-245.
- Pleket, H.W. (2014) 'Inscriptions as Evidence for Greek Sport', in Christesen and Kyle eds. (2014) 98-111.
- Polley, M. (2011) *The British Olympics: Britain's Olympic Heritage 1612-2012*. Swindon.
- Pritchard, D.M. (2016) 'Sport and Democracy in Classical Athens', *Antichthon* 50: 50-69.
- Reinmuth, O.W. (1971) *The Ephebic Inscriptions of the Fourth Century B.C.* Leiden.
- Rhodes, P.J. (1993) *A Commentary on the Aristotelian Athenaion Politeia* (revised edition) . Oxford.
- Rivolta, C. (2014) 'Il decreto del protaneo e la concessione della sitesis nel V secolo', *Erga-Logoi* 2: 79-91.
- Scott, M. (2014) 'The Social Life of Greek Athletic Facilities (other than Stadia)', in Christesen and Kyle eds. (2014) 295-308.
- Tracy, S.V. (2016) *Athenian Lettering of the Fifth Century B.C.* Berlin.
- Van den Eijnde, Blok, J.H. and Strootman, R. (2018) *Feasting and Polis Institutions*. Leiden.
- Vidal-Naquet, P. (1986) *Black Hunter: Forms of Thought and Forms of Society in the Greek World*. Baltimore.
- West, G. (1749) *Odes of Pindar, with Several Other Pieces in Prose and Verse, Translated from Greek: To Which is Prefixed a Dissertation on the Olympick Games*. London.
- Young, D.C. (2005) 'Mens Sana in Corpore Sano? Body and Mind in Ancient Greece', *The International Journal of the History of Sport* 22-1: 22-41.

Zebrowski, M.K. (2012) 'Gilbert West's Dissertation on the Olympick Games (1749): 'Established upon Great Political Views'', *Journal for Eighteenth-Century Studies* 35-2: 239-247.

アリストテレス・橋場弦・國方栄二訳 (2014) 『アテナイ人の国制 著作断片集 1』 (アリストテレス全集 19) 岩波書店。

橋場弦・村田奈々子編著 (2016) 『学問としてのオリンピック』 東大出版会。

納富信留 (2016) 「精神と肉体 オリンピックの哲学」 橋場・村田編著:57-104 頁。

師尾晶子 (2016) 「古代ギリシアにおける「他者」の発見と「他者」との境界をめぐる言説の展開—ヨーロッパという境界の策定の歴史的展開と近代における受容をめぐって」『国府台経済研究』 26-1 : 9-27 頁。

歴史学研究会編 (2012) 『世界史資料 1 古代のオリエンと地中海世界』 岩波書店。